

焼津の近代史から学んだこと

山 本 義 彦

はじめに

私は、この講演の本題が「明治・大正・昭和の焼津」というものなのですが、考えているうちに、大それたテーマでやると、焼津市民の方々ははるかによくご存知のはずなので、それはできない。私は控えめに、この「焼津の近代史から学んだこと」は何か、というお話がいいかなと思います。おかげさまで私が焼津市史に関わらせていただいて、たくさんの勉強をさせていただきました。これも市長をはじめ編さん室と、市民の皆さんが、大きなご支援を頂けた結果と思っております。そういう点で、まずこの場を借りてお礼を申し上げておきたいと思います。ありがとうございます。

さて、私はもともと経済の歴史を研究しております。経済の歴史は、簡単にいいますと、経済学で確立された法則を歴史の中で検証してみます。検証してみた結果、誤った議論を補正しなければいけない。そういうことが経済の歴史、経済史学の任務だと私は思います。ですから経済的諸事実を並べ立てれば、それですむというわけにはゆきません。要するに人びとの経済的実践を総括して理論化し、それをさらに現実の場で検証することによって、補正を加えて行くサ

イクルを持つべきものでしょう。そういう点で、焼津市の近代の中から学んだ新しい考え方というのがいえれば、いいかと願っているところがあります。それは、どの程度社会的意味を持つのかといわれると、対応できませんが。私は、焼津市史に関わる前に静岡県史編さんやその他いくつかの市町村史をやっております。静岡県史で静岡県内の東、中、西、あちこちの家を訪ねたり、役所を訪ねたりして資料を集める仕事を、まだ若かったものですから、精力的に取り組ませて頂きました。そういうこともありまして、色々な市町村の顔を見ながら、焼津を見ることが出来たという点で、新しい見方ができたらいいかと思います。

それではお話を次のように進めさせて頂きたいと思います。第一に産業革命と焼津近代漁業。焼津では、産業革命という歴史的事実がどのように現れたのかということを見たいと思います。これは、大学における日本経済史講義のようにならざるをえません。第二に商品作物の活発な取り組みが行われたのは、焼津だけではありませんが、静岡全体が、江戸時代から、今日に至るまで、いち早く商品作物化した地域であろうと思います。やはり、焼津を調べていてもそういう実感を持つ資料にゆきあたります。それから、第三に焼津

では、他の地域と同様に、戦争という問題が大きな問題でありますけれども、戦争を考えたとき、軍事徴用船のこと、そういう形で行われてくるのでしょうか、私は、もう少し大きなステージ、場面で、問題を捉えた方がいかという思いで、「戦争と焼津」とやってみる。四つ目が、「焼津水産業と地域社会の変貌」で、これは現在に通じる問題ということになります。この辺りの問題も、私自身は水産業のプロでもありませんし、漁業の問題の専門家でももちろんありません。ですので、これらについては、すでに、若林良和先生、大海原宏先生がお話されている、あるいはお書きになっているわけですから、私の立場から別の切り口で考えてみたいと思います。

一、産業革命と焼津近代漁業

(1) 産業革命の一般的性格

産業革命とは一般的に何だったのか、ということから始めなければならぬと思います。通例は、人々にとって必要な消費財とこれを支える生産財が共に資本主義的機械制大工業化を達成すること、これを産業革命といっています。つまり、工場制手工業（マニユファクチュアと呼びます）の下では、工場制の手作業ですね、機械ではなく道具ですね。こういう段階というものも、封建制の前近代社会で長らく経験しているわけですが、機械によって置き換えられる、人間の手作業が機械によって置き換えられるということが、非常に重要なポイントでありますし、それが機械に置き換えられる時にそれが大工業化、従来なら小さな建屋で作った物が、大きな建屋で作るようになる。これが、まず一般的な例だと思います。具体的

に、イギリスで紡織機械の成立を前提に生産財としての機械工業が形成されると、ものの本には書いてあります^①。しかしこれには補足が必要でありまして、元々、イギリスは、毛織物工業をやっていたのです。毛織物工業をなぜやっていたのかというと、フランダース^②でやられていた毛織物工業を取り組んだのです。ヨーロッパは概して寒冷地ですから、毛織物工業は大事な課題です。封建的な貴族たちが農民たちを追っ払って、土地を放牧地に変えてゆく過程が長らく進化したわけですね^③。放牧地に換えて毛織物工業が始まる。

そういう所から、そもそもイギリスは近代工業化が始まってゆくのですけれども、しかし、それが爆発的な機械制大工業になるのは綿糸紡績工業がなければできない。綿糸紡績工業となると、羊毛の場合、イギリスで育てられるのですが、綿花は豊富にあるわけがない。インドから獲得するということにならざるを得ない^④。ですから今でも、繊維で、日本語でキャラコという言葉があるではないですか。キャラコと言うのは、インドではキャリコ(calico)、アメリカではmuslinと呼ばれています)ですね。キャリコというのは綿製品のものですけれども(緻密に織った平織り綿布)、インドで作っていた綿製品は手織物。手織りで非常にレベルの高い物が作られていた。当時のイギリスではとうてい製造できないしろものだったのです。そこでそれをイギリスで作りたいと考えたイギリスは、実はペスト事件(黒死病)があつて十四世紀、ヨーロッパの人口は三分の一くらい減っているのです。だから、労働力が足りませんし、賃金が高くなりますから、ですから、機械に置き換えて、機械でそれを作ろうと、そういう働きがでてくるわけですね。そういう中から、機械に依存した労働が必要上出てくるわけです。アジアならば労働力が

多いですから、賃金問題の制約がないので、労働力を多く使った手織りで十分やれます。そうするとイギリスは綿製品を作るのはいいのだけでも、こういう綿製品を作るかが問題なのです。イギリスの綿製品というのはどちらかというと、細い薄手の綿製品を作る。なぜ、そういうふうにしたかというと、まずは、イギリスは寒冷地であって暑くない。第二番目にイギリスが意識したのは生糸なのです。生糸織物と対抗できる綿製品を作らなければいけない。そのための機械を作ろうとそういうことになる。糸といっても、綿織物の糸と生糸と対抗できるレベルの物にして行きたいというように当時考えられて、現在に至る綿製品の基本が出来上がる。それはとても手織りでは出来ません。手織りの綿製品は、どこでも、中国でも日本でも作っていたわけですし、それはどちらかというと厚手厚手というのは簡単なことで、アジア社会はモンスーン気候ですから、温度と湿度が高く、発汗作用が大きいので、当然吸水性がないと繊維として意味を持たない。ベトベトしてしまう。だから、厚手の方がいいということになる。そういう点では、アジアは機械を使わなくて手織りで長らく使われていた。イギリスの場合、そういう道が必要としない^⑤。

(2) 日本の産業革命と鉄原料確保の意義

後発国としての日本とはどういうことでしょうか。イギリスの織機、紡績機械に依存して近代綿糸紡績企業が形成され、日清日露戦争（明治三十、四十年代）を通じて旋盤などの工作機械が製造段階に突入しました。工作機械を作ることが出来ればいいのです。工作機械を作りさえすれば、旋盤ができるのですから、旋盤が自ら作

れるようになることが大変重要な近代工業化のポイントなのです^⑥。その原材料としての鉄。これが問題。日本の国内の鉄では十分取れません。新潟県の赤貝鉱山があり、初めここから鉄が取られていたのですけれども、品質が悪くて、少量ですから使い物にならない。いい鉄は、中国にしかない。その次に、石炭があります。石炭はカロリーが高く、温度が高くなければ、いい鉄分を析出できない。その石炭の質が高いのも、日本の国内には残念ながらありません。八幡製鉄所があったでしょう。官営八幡製鉄所は北九州で採れる石炭を使っていたのではない。中国（香港）から長崎港を経由して石炭を輸入している^⑦。

中国へ行かれた方はお分かりだと思いますけれども、驚くべき状況で、例えば、鞍山^{アシヤン}製鉄所もありますけれども、撫順^{フシュン}の無煙炭。この石炭の採り方はすごいですね。山そのものが、石炭です。ですから、炭鉱を掘っているという感じがありません。つまり露天掘りなのです。強粘結炭といえますから、粘りが強くカロリーも燃焼温度が高い所でいけるわけですね。そうなれば、鉄鉱石から純度の高い鉄が取れる。こういうものが確保できるというのが大変大事です。この時中国は清国ですから、清国政府は、漢冶萍^{ハンイェヒン}煤鉄廠有限公司というのを作っているのです。これは、官営八幡製鉄所と同じ考え方で作ったのです。日本はこれに目をつけまして、日清戦争後、煤鉄会社に資金融通を国家資金で行いまして、その経験・技術を確保するのです。確保して、煤鉄会社のねらいは、官営八幡製鉄所と全く同じで鉄を作る目的で作ったのに、ここの経営内容を変えてしまっています^⑧。

そこで、日本は確保できた鉄や石炭を日本に輸出する機関に置き

換えます。ある意味では、福岡に製鉄所を置いたというのは、理屈がないわけではない。一番近い港が長崎ですから。長崎から中国の鉄鉱を入れて、製鉄事業をやった。そして、近代工業化をやった。こうして、機械工業化の原材料確保をしながら、イギリスの織機とか紡績機械とかのレベルの高い機械は、とても日本では作れませんでした。大体、豊田の織機が、一九二九年（昭和四）にようやくイギリスの最先端の機械のレベルを超えまして、イギリスが技術を豊田から買うという、そういうようになる位ですから。初めはとも日本⁹の織機ではイギリスの綿糸紡績織機のレベルに対抗できないわけです。機械を買っていかねばならない。そんな形で工業開発をしていくわけです。

（3）産業革命前の日本経済と松方デフレの意義

さて、イギリスは資本主義工業化を前に、畑地の羊放牧場への転換（土地貴族の資本家階級への転換）、鉄器を使用した生産力の高い農業生産を作り出す（借地農業の形成）。そして、離村農民を都市に大量流入させ、都市流浪民になる。それが無産労働者となって、イギリスの産業革命の時の労働力へと転換していく。¹⁰ 初めから労働者が生まれるわけではない。今でいえば、大量の無業者と考えることができる。日本は、明治中期、一九八〇年代（明治十三年から二十三、四年）までの間に、明治の元勳松方正義、薩摩藩出身ですね。松方正義が徹底的なデフレ財政政策を行いまして、地主制を作り出すこと、¹¹ 離村農民の都市への流入、民営鉄道資本を育てること。焼津は、森信勝さんがお書きになっている焼津―藤枝間の木道線が始まる¹²といわれているのですが、これが日本最古の民営の鉄（木）道だ

ったというのが森さんのお仕事だと思えますが、こういう民間の鉄道資本というの、とにかく育てる。運輸ルートを開発することなしに、資本主義工業化ができませんから。それをまずやる。鉄道は、ご存知のように、土地はたくさん必要ですし、鉄道を通してものように何分ごとに走るということは有り得ないわけですから、ものすごい設備投資で資本回転率は悪い。利潤率が低い。低いですけれども、初めはこの国でもその投資から始まる。日本は。アメリカの場合も似ている。近代工業化する場合、輸送経費の節約というのが非常に重要なポイントになりますから。

（4）産業革命の日本の特質

日本では、機械制大工業、綿糸紡績業、国営軍事工廠、財閥系製鉄、造船、これらは何れも外国製機械導入による。日清戦争後、一九〇一年官営八幡製鉄所設置、民間の一八八九年（明治二十二）池貝庄太郎により東京芝金杉川口町に池貝工場が創設され、国産旋盤第一号機が完成。一八九六年（明治二十九）日清戦争の次の年ですね。国産第一号の石油エンジンの製作。一九〇五年（明治三十八）日露戦争の年ですね。日本での決定版とも言えるべき池貝式標準旋盤を量産される。主として生産財工業。こうして、標準的な旋盤が大量生産できるようになって初めて、日本でも工業開発が自らの力でやれるようになる。ただ重視して頂きたいのは、綿糸紡績業は、日本の場合、初めから大企業なのです。イギリスは伝統的な手織物工業から始まって、綿糸紡績工業へ移っていきますので、機械制が初めから入っていったわけではありませんから、元々規模が小さい。そして、糸を作る紡績業と織物を作る織布メーカーは別。染織メーカー

も別です。ところが日本は、糸から織物まで一貫工場として展開する、その最初が三重紡績で同社と大阪紡績を合併して発足した東洋紡ですけれども、⁽¹³⁾そういう意味では、早くから機械を持ち込みましたから、労働力についても、イギリスは男子労働力が基本です。日本は、はじめから機械を持ち込んだので、若年女工活用という形態が可能だった。そして、熟練を相対的に要求しない労働力によって、進められていく。そのような、綿糸紡績業が日本的な在り方です。機械はイギリス製を使う。国営軍事工廠、財閥系製鉄、造船、これらもいずれも外国製機械や技術に依存しているわけです。私が調べたことですが、例えば、三菱造船。実に多様な国々からの技術を導入するのです。これが日本型の特色だと私は思います。つまり一般的には、イギリスの企業は、自国で作った工業技術によって工業化します。工業発展をしていきます。そして、他の植民地国もそれを模倣しますから、ほとんどイギリス植民地ならばイギリス型の技術だけになります。日本は、そうではなくて、いろんな国からの技術をブレンドしてしまいます。色んな技術を取り込んでしまいます。造船業では、かなりたくさん技術を織り込みます。スウェーデンの原動機技術。イギリスからなど。色んな物を入れて機械工業化の中でブレンド（ハイブリッドともいいます）していく。そして工業開発していきます。個性を失うという点もあります。一番レベルの高いものを造りやすいということにもなります。⁽¹⁴⁾それから、その他の工業。

今いったのは、機械制大工業ですが、その他の工業。つまり、国民のほとんどの消費生活に関わる分野というのは工場制手工業のままだす、日本は。その特色という点でいえば、生糸が最たるもので

す。生糸は、機械制大工業になりませんでした。とうとう、昭和十八年、一九四三年になって豊田がようやく生糸の織機を作り出します。けれども、それはもはや戦時下で使うわけではありませんので、これで、戦争が終わりますから、意味はありませんでした。これは、今でも長野県岡谷の蚕史博物館に展示されています。ですから、そういうところまで来るには、ほとんど江戸時代から繋がってきた工場制手工業のままで日本は生きていた。国民の日常消費の中で綿製品は機械制大工業。他の物はほとんど近代社会になる以前からの醸造業を含めて、工場制手工業的に経営されていくということになる。⁽¹⁵⁾

そうすると何が問題かと言うと、その他の産業は日本経済の自前の力で運営可能です。ところが、欧米に追いつけ追い越せとがんばった分野はほとんど海外からの輸入に待つのです。原材料も機械もそうです。ですから、一部に伝統的な理解がありまして、綿糸紡績業というのは、日本で作った綿製品をほとんど海外に輸出した産業ですね。そうすると、海外輸出型なのでそこで儲けたはず。⁽¹⁶⁾綿製品会社としては、儲けたのでしょうけれども、私が対極的な見方を申し上げますと、綿製品工業というのは原材料コストを六割方海外に外貨で支払わなければならない。紡績女工に一割程度の人件費を払う残りが利益。しかもそのうち製品の半分は、国内消費に回しますから、トータルで見たら日本は戦前、綿糸紡績工業で輸出と輸入を相殺するとマイナスです。一九三五年から三六年にかけてプラスに転じた時期があった。これは簡単なことで、中国向け輸出が伸びただけです。中国向け輸出が増えても円元パー（円と元を等価にしていた）ですから、外貨が獲得できたわけではないので、意味がない。

文字通り儲けたのは、生糸です。生糸だけは、自国産であり自国の労働力を使い、そしてそこで作り出したものが全て利益になった。作ったものを七割位海外に輸出し、そのうちの七、八割はアメリカ向けですから、ここで獲得した外貨（ドル）が決定的です。日本は資源輸入を基調として貿易収支が恒常的に赤字なのです。赤字ですから円安。円安なのですが、赤字でどんどん外貨を食ったらどうするのか、外貨を食った分、アメリカからしつかりとドルを受け取る。それが一九三〇年代の初め、昭和五、六年（一九三〇、三二年）の初め位までは、これでバランスが取れていた。生糸輸出で生き長らえた。明治のしばらくの間はお茶の輸出もあり、それでバランスを取った。大体、多いときで明治中期直前で輸出額の一七％程度を占めて、その後の生糸並みであった時期もあります^①。これは、明治の中期後期に入る頃までですから、この後はそれほど占めていないので、代わるものは生糸です。ですから、生糸というのは、非常に大きなバランスシートを取る力なのです。

（５）焼津にとっての産業革命、そして赤阪音七、焼津生産組合、東海遠洋漁業

さて、焼津と産業革命の話ですが、沿岸漁業から遠洋漁業への転換というのが、ちょうどこの時期です。焼津生産組合が結成され、焼津の東海遠洋漁業が出来るのもこの時期です。十九世紀末から二十世紀初頭、明治三十年代の初めとこういうことになりますから、まさに、日本全土でも、産業革命の時代。焼津は、漁業を中心として地域経済が活力を持ち始める。これを支えるのに、池貝鉄工の技術者であった赤阪音七が非常に重要な役割を果たしたと考えておりま

す。赤阪音七が池貝鉄工の技術者であったのが決定的です。池貝鉄工が旋盤を最初に作ったメーカーです。池貝は有能な技術者を見出した。その人物が焼津生産組合にまねかれて来て、ここで焼玉エンジンの基礎を作る。これがなければ、漁業があれだけ大きな役割を果たすわけがない。焼津市史を調べていましたら、明治の中期まで焼津村というのはどの道をいくのかわからない。小さな村ですよ。今見るこのような町にならなかった。ですから、「寒村」と書いてありました。自ら寒村と表現しているのです。だけでもこの時期から大きく転換を始めた。この力は、漁業の在り方の変換によるのです。これがなかったら、多分、焼津はこうならない。しかも東海道線が、偶然、岡部の方ではなく、焼津へ来ちゃった。

私が調べたところ焼津の人たちが誘致運動をした形跡がない。焼津村ではやらなかったのだと思うのです。鉄道の効果、意味というのがわからなくて。多分。現実には、鉄道が来た。鉄道の敷設技術からいって、石部（現在の静岡市）からトンネルを通して焼津にやって来る。そこをわざわざ岡部の方を回すというのは、ないので。当時、^{つた}薦の細道の険しい所をくぐり抜けるのは大変なことです。しかも、明治二十二年（一八八九）国会が開設される時には、どうしても開通していなければならぬという、絶対命令がありますから。そういう背景のもとで、焼玉エンジンというのが漁業発展にとって大きいのです。焼津生産組合というのがマル生という、今の焼津信用金庫の始まりですよ。これの支えで、焼玉エンジンを漁船に装備することによって、沿岸漁業から近海漁業、そしてさらに、中近海から遠洋へというように。それと、鉄道とがマッチングした。産業革命、「焼津型」というように考えたらいいのではないかと思います。

そして、静岡県がバックアップしました。「富士丸」という練習船を作って、海洋調査をしながら、情報を流すというようなことをやった。これも、歴史的な意味があることであって、今、地方自治体が構造改革でどういう役割を果たすのかわからなくなっていますけれども、実は、私は戦前に非常に愛着を持っています。調べるところ、調べれば調べる程、戦前というのは意味のある時代だったことが分かります。経済史的に見ますと、官僚機構が地元産業をいかにして育てるかということに、非常に力を注いでいます。各地に国営試験場を作る。水産試験場であったり、あるいは繊維の試験場と作ってみました。そのコピーで県のレベルでも造ります。さらに、学校を作ります。職業学校を作ります。みな意味のある施策です。

私は、今から十五年ほど前、アジアにおける日本の近代工業発展の教訓を語るといので国際シンポジウムがあつてその話をしたのです。アジアの人々やアフリカの人々が学んで欲しいのは、自国システムとしてそういうものを作って地域を育てるという考え方をいかにして日本が作り出したか。そこを学んでもらいたい¹⁸。まさに、当時焼津水産学校が出てくるのも、県が意識的に「富士丸」を作るのも、ひとえに当時の行政官僚の発想があつたというように思います。この当時は、農業と工業を併せて農商務省といっておりました。それが、大正期後半に農商務省工務課という組織ができます。工務課というのが後に商工省になります。工業官僚の草分けは、吉野作造の弟吉野信二です。吉野信二の弟子が満州国商工官僚として有能であつた岸信介です。岸信介の孫が、安倍晋三(首相)さんです。焼津の場合、特色ある漁民養成制度としての船主、船頭、船子組織の継承と安定的な、漁業労働継承システムをもって富の配分形式を取

ったということが、結果的には、焼津の特色ある安定した水産業の経営とそれを支える、県や国のバックアップシステム。こういうのが、焼津の産業革命の一つの特色だと思ふのです。

赤坂音七(一八八一年〜一九五三年)は、余りにも知られているのですけれども、調べると興味深い人物ですね。一八八一年兵庫県淡路島洲本町に生まれる。鉄砲鍛冶などを手がけた後、鉄工所(横浜、池貝鉄工所)に入職し、焼き玉機関の製造に従事。入職早々より機械作りの天賦の才能を発揮し、漁業用としては第一号の石油発動機の始動方法を発見し、漁船機関の発展に貢献する。一九一〇年(明治四十三)、運営指導に当たっていた焼津生産組合の機関修繕工場の業容が拡大し、一九一二年(大正元年)赤坂鉄工所を設立。船用内燃機関の開発製造に従事した。非常に必然的に起こっている過程ですね。もの作りというのは、短期間で出来るものではない。小さい時からの意欲、関心と言うのが大事です。学校教育の在りようというのは、ここから重要です。

赤坂の人物を調べていると、若いとき、小さいときからの関心というのは大事ですね。小さな話のようですけれども、小さいときにコンピューターゲームに勤しむか、プラモデルで遊ぶか、どっちがいいかというと、私はプラモデルの方がいいと思いますね。その前に、木工細工をするのがもっといいのだけれども。私も子供時代に木工でマッチ棒や空き箱を利用してトロツコや自動車を作った記憶は今も忘れられません。もの作りの意味というのは、そういうところから教育されているのです。今、プラモデルメーカーに聞くと子供がプラモデルを作らないそうですね。中高年の世代が作っている。そういう点は重要です。この人たちがものづくりの高度成長を

支えた。

ものの作りの原点に、その生命を支える品質があります。赤阪鐵工所の歴史は一九一〇年（明治四十三）に漁業の町―焼津で船のエンジン修理を始めたことに遡ります。普通、産業革命の話をするときに、繊維工業だけの話をする人が多いのですけれども、それが一番分かり易いから。地域の特色に根ざした大工業化の歴史、あるいは、近代産業化の歴史があるということを考えるのも産業革命の重要な課題であると思います¹⁹。

静岡県練習船富士丸。第一世富士丸は、全国で初めての石油発動機付き漁船として建造され、漁場の拡大調査に果たした役割は大きく、今日の静岡県遠洋漁業の基礎を確立した。本当は自治体というのは、地域の産業活力を支えるための支援事業がありうる。ある時に金融ばかりで支えたらいいという時代（一九八〇年代来のバブル絶頂期）があったのですが、今のような低金利だと意味がなくなる。竣工は、一九〇六年（明治三十九）四月、総トン数二五トン、定員二三人、小さなものです。建造費九千二百二円九三銭五厘²⁰。これは、小さな村の一年間の財政規模です。私が今から二十数年前に調査して書いた袋井市史では、久努村という村の村財政が九〇〇〇円。ちようどこの位です。高くても一万五〇〇〇円程度です。

（6）日露戦争と缶詰工業の創世

その次、日露戦争と缶詰工業です。漁業が水産業としての意味を持たせるといことです。缶詰工業が始まる。焼津の特色です。日露戦争に際して、全国各地の製造業者に軍用缶詰製造を要請し、焼津では長谷川磯五郎外一名がイワシ、カツオ、サバ、削り鰹節を三

万円納めている。一九〇四、五年です。しかし、長谷川らの外にも県内で沼津二業者、相良一業者が合計四万三五〇〇円、全国合計でも一一六業者五三七万円にも達する状態であった。この中で長谷川は三万円も納めている。というわけで、焼津の缶詰工業の始まりというのは、この時期の一つのトピックスとして重要だと思われます。鰹節が当時の品評会の最大の目玉だといっても、塩蔵物、蒲鉾、乾燥品、缶詰類がこの時期焼津で発祥する。これも、産業革命の焼津では、これから始まったということが分かるのではないでしょうか。

二、商品作物の活発な取り組み

（1）大正期の農村生活―大富村通信

商品作物の活発な取り組みは大正期なのですがこれを見ておきましょう。大正期の農村生活の状況（資料）（大富村の記録）を見つめました。これによって分かることは、まず、農作物が多角化しているということ。梨園がこの時期、非常に作られます。東益津村では、農業と漁業の兼業が進む。漁業を本体とする農業の兼業という形です。漁民も年



大富村通信

齡が高くなると漁業に直接携われなくなりますから、そういう人たちは岡に上がって、田畑の耕作に従事するとか、そういう形で、東益津村で見られます。兼業というのは、日本の社会の特色でもあるのです。農作物そのものは米が本体ですから、様々なものを作ったこと自体が兼業です。その決定的なものが、生糸です。米と生糸を両方作っているわけですね。それで成り立っている。

農村は、農家経営規模が小さいですけども、元々多角化する、多角化して生きるという必要性を「大富村通信」が示しています。それが、焼津でも同じような問題がこの時期に活発に見られるということです。村長が恐らく有力者に出す形を取っていて、原川衛家文書として伝えられているが、実は市史でも使いましたけれども。「大富村通信」第六信は、冒頭に村からの入営者、退営者の所属などが記されて後、昨年の米の収穫はほぼ平年以上で、十月の本村園芸品評会も二年前の開催時と比べて、「進歩の長大」、柑橘類は言うまでもなく、蔬菜の各種、大根、蕪など優良な成果を収めたものも多い、というような記録もこの時期に既に出てきます。まさに「その進境の顕著ナルを認め申候と共に農家副産の一要素として愈々益々之を奨励するの要を感じ候」ということで、村長が率先して農産物の奨励、様々な副産として梨とかそういったものに広げようという記録になります。

「狂瀾の如き時勢の推移」というのは、大正期の第一次大戦期の沸騰した時期です。「村内電灯点火も正に近付き」と村内に電灯が付いたのがこの時期だったのです。「藤相軽便鉄道は藤枝大手より（岡部）停車場間開通相成候も村内を貫通する処の駿遠軽便鉄道は干今起工の運に至り申さず前途あまりに樂觀すべきこともあらず」、駿遠

軽便鉄道というのは、焼津大富村をかすめるかなあというイメージなのですけれども、そんな記録があります。構想は岡部から始まっていたのですね。岡部、藤枝大手というように考えていたのですが、結局、藤枝大手から始まったのですね。

また年末から米価が大きく下落し、農村の打撃も大きく「七円台の相場は一大苦痛」という状況を迎えたが、この年こそは繁栄を期待しようというものである、という記録が村長さんの記録に出てきます。この記録というのは、原川淳吉殿と書いてありますが、宛先を付けていて、第四信に、今申し上げたことが書いてあるのですけれども、手書きめいたものでかかれたものなのですけれども、手書きでは出来ませんから、一種の謄写版みたいなもので、コピー版で作って村内の有力者に配布するのですね。村長さんの施政方針演説みたいなものと考えてもいいかもしれません。

ここで、軍隊について除隊した人はどうか、所属部隊はどうだとか書いてありますから、村内の細かい生活記録として役割を果たしたと思います。この時期に、焼津では見つけることは出来なかったのですが、明治末から大正期というのは、政府が率先してといていいと思いますけれども、各村のニュースを作らせるといふのがある。「村報」ですね。静岡県内でも各地で手に入りましたけれども。村報というのは、一年間に何回か村長さんの所信を述べ、暮らしぶりを示す、こういうように技術改良されたからがんばりましょうとか、今でいう、「広報やいづ」、「焼津市政要覧」にあたるものが、この時期には、作られていたはずで、大富村だからこういうもので過ごしていたかもしれないですね。「大富村通信」大正三年七月十四日というのを見ますと、「米価の低落につれ世間一般二不景

気の歎声^{たんせい}二満たされ、せめては製茶の売れ行き良かれかしと、我れ人切望^{つかつりあ}罷^{そうろうと}在^り候^に。処幸^{しゆき}にして前年二比志^し幾段の好調を保ち居り、並物三円位二売れ行き候へども発芽^{こま}殊の外^よ宜^{よろ}しからず、減収^{へんしゆ}の甚^{はな}だしかりしは遺憾^いの事に候ひし、かくして、二番の発芽は反対二良好なるもの二有^{これあり}之^の候^に、相当に売れ行きを見せた。

つまり、村長さんというのは村政を預かっているのですが、村政といったら農業ですからね、大富村の場合、農業の発展ぶりを告知させてゆくというのは、課題だったかと思います。「今や世運の向上に伴いて納税の如き臣民の負担の増大、亦免るべからざるもの二有之候」と指摘することも忘れてはいない。「一村の生命は農業ニして、其発達如何^{いかん}は、やがて一村の盛衰に関する次第、極力、当事者の奮励を望む次第」という激励を送っているのですね。第七信、大正三年九月九日、「残暑耐え難き折柄益々ご健勝に渡らせられ一意軍国の為め御尽瘁^{じんすい}の御事と慶賀^{けいが}」し、「欧州の天、戦雲むら立ちさつき漲^{みなぎ}り渡れりとの報は、終に現実とは相成り、世界の列強^{りつしやう}が砲火を交える状況となった、その余波は東洋にも及び、「我帝国と独逸^{ドイツ}国との間^{すでに}已^に国交断絶の今日国民の血は湧き肉は踊って挙国尽忠の決意^{けつぎ}固^{かた}」める状況にある。奮励努力というのが、躍動的に見える。色々な記録がありますけれども、村内の経済情勢を伝える。政治状況を伝える。農民たちは毎日汗水たらして、農村生活をしているのですから、そこまで意識がなかなか進まなかったかもしれないですね。

第八信というのがありますけれども、「戦争のために本村内住民にも動員下令がかかったので、村長はこの人々に見舞いを行っている。その実数は二十名にも及んだ」というわけでこの通信では村の状況報告はもっぱら戦争動員の状況説明に終わっている。第九信大正三年

十月十日付一九一四年、第一次大戦ですね。この時期は軍国のイメージが非常に強い文章になっているのですね。村長さんのカラーだと思えますね。「軍国のための頑張り」をしてはいるけれども、不況は逃がられず、米価の低落による本村農民の苦境を語っている「時局二鑑み九月二十六日動員下令当日を以^もつて奨兵会を組織^し志^し」、出征者全部に対する慰勞会、家族保護金の贈呈などを行っている。またこの外に隣村静浜村に一五師団が秋季遠州で宿営することになり、本村からも布団の貸し出しに協力している。皆さんご記憶の方もおられるでしょう。第二次大戦中もこの類のものがあつたと思われますね。袋井市史を調べたときにも、ありましたから。第一〇信といった手紙のような書きぶりもあるのですね。

第一次大戦中は戦争に動員される人はそんなに多くはなかったはずですが、一生懸命、そういう流れを作っていたという風潮はありますね。一九一五年、大正四年七月五日の第一三信を見ても、この時期になると、米価が上がりすぎることです。これもこの時期の特色です。大戦というのは、大戦が起こると同時にブームが来るのではないですね。しばらく経済情勢は沈滞するのです。沈滞するというのは、将来の見通しが立たない。物資の流れに波及しないのでしばらく沈滞する。そのうち、ブームになる。そういうことなので、農家一般というのも、すぐに乗ったわけではない。「何れの町方も不景気の歎声二充たされ居り候」「小学校で不祥事が発生し、懲戒処分者をみたことが記されている」、何か分かりませんが、こういうことがあつた。一方で「農産物事情ではきうり、茄子^{なす}が好調で、稲も根付きが良い」という農村情勢も、多少出てくるのですけれども、この時期、かなり戦争のことを描いていることが多い印象を受

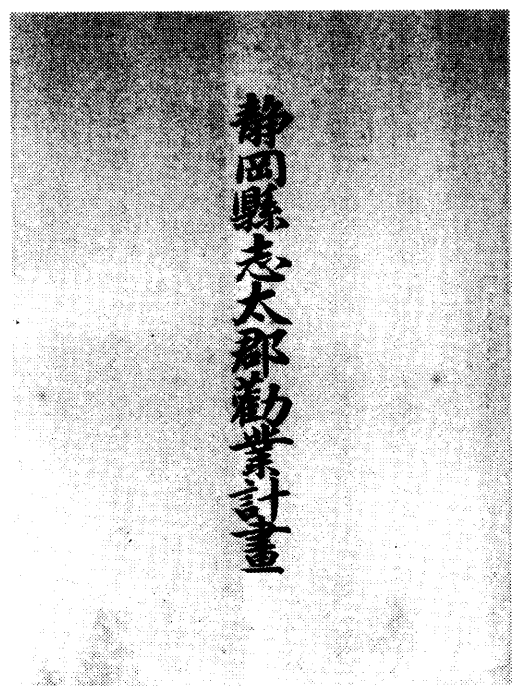
けました。

一九一五年、大正四年九月十四日第一四信「奉祝記念公会堂も竣工」、この年、大正天皇の即位式をしているのである。奉祝記念公会堂も竣工、開館は即位式当日を予定された。当日には神社での祝祭が予定されていて、小学校教員にこれにあたらせることとしてその準備の訓練が始められた。大嘗祭にもこの祝祭が行われる予定である。農事では害虫駆除に努め、夏季休暇中に小学生に駆除協力をさせることになっていた。この時期、「自治体」ということばが出てくる。戦後の自治体こそ自治体なのです。戦前は「自治体」という言葉に当たらないのですけれども、つまり、官の従属物ですから。ところが、「自治体」という言葉が出てくる。これは、大正デモクラシーの産物です。大正デモクラシーの時代ですので、「自治」「住民自治」という言葉が自然に使われる。デモクラシーという言葉も公用文書に出てくる。もともと明治二十一年（一八八八年）四月の市制町村制には「自治」という言葉が出ておりますが、戦後の住民自治とは異なります。行政的文書の中でも、時代を反映するのです。デモクラシーとあって、民主主義とは書かない。民が主ですから。ご存知のように、大正デモクラシー期の旗手であった、東京帝国大学吉野作造教授は、民本主義という言葉でこれを作り変えましたね。民主を避けて。民を本にする。君主主義であったから、民主という言葉は、禁句ですね。たまに民主と使われるときもある。こんなふうに、断片的な事実からでも、たくさん出てきます。

（２）農業生産の多角化への取り組み―「農場日誌」

農作物の多角化という観点では、『志太郡地方改良月報』という

のが、出てきます。地方改良運動というのは、日露戦争から戦後を通して、税金が非常に全国的に高くなり、日露戦争推進のために、高くなつた税金が下がらないままそのままで大正期に入ります。ですから、赤字国債を大量発行していたのです。日露戦争の戦費の六割は英国債、イギリスに外債で発行しているわけですから、結果的には、日露戦争で非常特別税という形で、大増税した。そのレベルをそのまま下げずに行くと地方が疲弊する。それで地方改良運動という住民統合組織化が行われる。地方改良運動なので、「地方改良月報」というのが地域によって作られる。「本年四月から各町村農会に専任の監督を置いて普通の農事はいうまでも無く、茶業、柑橘、蚕糸業、木炭、畜産等の組合の事務も皆農会で取り扱ふ事になりましたから之等の技術上の事は勿論其の他の事務についても遠慮なくどしどし農会へ申出る様になさい。稲苗代、柑橘、梨の病害予防、肉牛買上、茶業、養蚕、木炭の各項目について、それぞれの課題別に解決のための方策を掲載」する。だから、柑橘、梨が重要ですね。木炭も重要な農業の副産物です。



続いて、『静岡県志太郡勸業計画』産業奨励二関スル件、諭告第二

号。

「古来農八国ノ基ナリト言ヘリ、文明^{いよいよ}弥々進ミテ商工業如何ニ進歩スルトモ其原料ハ凡チ農家ノ生産物ニ仰力サルヘカラス、サレハ商工業発達スルニ生産物農業ハ益々肝要トナレリ、一国一県ニシテ然リ、況^{いは}ンヤ本郡ノ如ク農業ヲ以ツテ最モ大切ナル生業トシ郡民ノ幸モ不幸モ一ニ農業ノ成績ニカカルニ於テヲヤ……他郡ト比較スルニ土地ノ面積ト人口トニ比シ産額割合に少ク品質亦概シテ良好ト云フベカラズ、又農民ノ覚悟、耕種栽培ノ方法、農具ノ選択、耕地勞力及資本ノ利用等ニ於テ改良ヲ要スル点頗^{すぶ}ル多シ」ということで、農業技術改良というのは、この時期大事なポイントになっている。これは、全国的にもそうです。

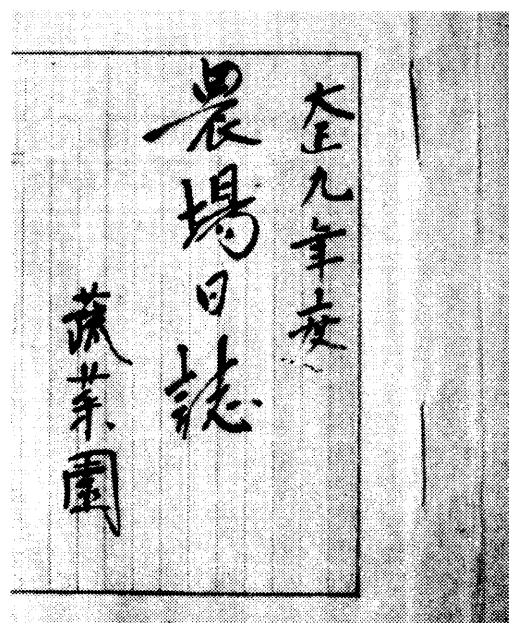
私が、強調したいと思うのは、もの作りというのは大変大事なんだということです。農業をおろそかにする国は、大変です。今、日本が大変なのは、食料自給率が四〇%を切っていることです。先進諸国で日本が最低です。だから、どこかの国のいうことを聞かなければならなくなってしまう。これだけです、本当は。エネルギーもそうですけれども。先進国の中で、日本は自国資源依存度をまだ下げてゆく国なのです。ところが今、先進国は、引き上げているのです。フランスも一〇〇%越えています。これは、全部ここ四十年位で変わって来ている。今までは、下がっていたのです。日本だけが、一貫して下げている。まだ、下がりますよ。三〇%台にいくでしょうね。どうするのでしょうか。少子化だから食べる人が少なくなっているじゃないか。そうかなあ、と思いますね。「郡民諸君へ」の呼びかけというのがありますけれども、やはり、自治という言葉を使う。この時期はしきりに、自治という言葉を使うのです。制度は変

わらないけれども、自治。

これが、この時期、大正デモクラシー期のエピソードかと思えますね。国民の自治思想を喚起する。だから、

「公共心と共同心との涵養を図り」としていますね。これはまさに現在の日本の政治問題だ。

あとは、桜井家の農場日誌というのを、コピーして配りましたので、読んで頂くといいのですけれども、簡単にいうと蔬菜園^{そさいえん}に関する、農場日誌です。こういう形の簿冊なのです。そこに、実にきめ細かに記録されています。藁^{わら}仕事して、色々なことをしているのです。藁仕事というのは、重要なのです。農村にとつて、米から藁を作つて、藁からロープを作つたり、包装物を作つたり。静岡は、菊川・掛川・磐田。その各駅、昔は堀之内駅といっていたのです。菊川は、これらの三駅の藁製品の東京向け輸出というのは、全日本で、宮城県黒石に次いで多いのです。黒石は、小樽のサケマス漁業に、静岡の地域は、横浜開港場に藁製品を輸出。同じようなことで、藁というのはこの時期、当然農村の仕事でした。そして、それは夜なべで奥さん方がやっていた。この日誌をご覧になると、農業練習生が見学に来ている。雨の日は、室内藁仕事とか。



農場日誌（焼津市歴史民俗資料館所蔵）

これも、資料に入れましたから、後で見ただけでいいと思いますが、「曇りで室内薫仕事」というような記録が出てきます。促成場なんきんで南瓜を作る。こういう形で商品的な農業を進展させてきたシナリオを作ってきたということもこの家の特色であります。こういう動きがあるということを見ておきたいと思います。几帳面きちょうめんですね。当時、こういう形で記録して、毎日毎日のように何人で働いたとか、この時期は、どんな肥料を入れたとか、これが、次の世代へと引き継がれていくわけですよ。こうして農業技術改良というのが進んで行くのだと思うのです。全国的にもこういう努力が随分行われています。

「役場事務報告」を見ますと、このようなものが見られます。「八月十四日米価暴騰ニヨリ町民二不穩ノ形勢有リ」として、米騒動ですね。米騒動の騒ぎがあつたということで、「人心鎮撫ちんぶ」することが必要だ。ということが出てきます。「当町（焼津町）ノ米穀商組合ハ役場ニ於テ十六日ヨリ向三日間廉売れんばいヲ行フ旨ヲ達シ、町ハ別ニ適當ノ救済策ヲ建テ一方ニハ教唆扇動相応するが如キ不穩ノ騒擾そうじょうニ雷同スルガ如キ事無之様、区民へ急告ス、八月十五日午后六時ヨリ本町ニ騒擾突発シ挙動極メテ獰惡ねいあくを極ム、三時間後警官ノ来援ニヨリ鎮静スルコトヲ得タリ」騒ぎがあつた—という記録が役場の事務報告に出てきます。こんなこともこの時期の状況でしょうか。

役場職員の給与の引き上げというのもこの時期に何度も行われます。そうでないと、間に合わない。そのたびに税金を引き上げるのです。間に合わない。ということが行われております。

(3) 農業、漁業兼業の村—東益津村の状況

農業と漁業の兼業地域、東益津村の状況というのがあります。昭和三年（一九二八年）七月二日から七月八日の調査であります。これは、東京帝国大学農政学研究室が調査したものです。⁽²²⁾そこでは漁業八分、農業二分を生業としている。この東益津村は、農耕地は現在戸数一戸当たり田畑三反歩余り、女子によって営まれている。明治後期の発動機船の登場以降、沿岸漁業から遠洋漁業へと拡大し、焼津の隣接として、その経済活動を焼津に依存することになった東益津村は、その漁業だけでは食えない。そこで、農業に女子供が従事するという報告が出ています。これも、興味深いことがたくさん出てきます。この当時、専業漁家は、二二%くらいです。半農半漁を加えると七三%が漁家。この時期、専業としての漁業をやるというのは、東益津村では、大変ですね。だから、こんなふうになったのだと思います。漁業七九戸のうち農業を兼業したのは六六戸、農業一八戸のうち漁業を兼業したのは一二戸、その他一五戸では漁業を兼業したのは二戸、漁業を兼業したのは九戸。農業を本体にしているか、漁業を本体にしているか、という調査が東京帝国大学農政学研究室がわざわざ調査していることを、報告しておきたいと思えます。全国どこもかもやれるわけではないので。所得の話もありますけれども、ご覧いただければと思います。東益津村浜当目地区の飯米自給状況というのがありまして、全自給が三七%。昭和の初めて自給及び購入が四二%。全部購入しているのが二一%。

「青年団日誌」がありますけれども、満州事変の時期の状況で、青年団の日誌というのは格調の高い内容です。

一、現在社会ヲ見るに思想經濟人口食糧等外二満州上海事変等多事多端なる此之時二生る青年は一層奮勵努力して国難ニヤマル事を受け自力更生

政府モ救済としては「自力更生あるのみ」と称シ自力更生ノ気分ヲ發揮スルニ致し候。首相自ら街頭に進出シ自力更生の運動をした事は極めて結構な事である。しかしその結果は何等見る可き氣運はない。何故ならばそれは唯表面的行為のみで有り、極端に云へば、かけ声ばかりで有る。内外の紛乱其の局に達して居る今日、通り一辺の事では断じて其の打開は出来ない先決問題として自力更生の意義を明確に認識しなければならぬ自力とは何ぞや

宇宙一細胞としての自分の力これを小さく云へば神の生める日本の一国民としての力吾等が細絶たる事を目覺して運動は宇宙の本源力、神たる親への脈絡が当然すぎる程、相通づるのである。此の力が認識することが出来ぬ現代となつて居るが故に現在の崩壊運動が起て居るのである。支部青年奮つて此の国難を救ふ事を希ふ

支部員 原川亀次

こんなレベルの教養をみんな持っていたということになると、すごい教養だと思ふような文章が出てきます。青年団というのは、當時力があつたということだと思います。

イワシとならんでマグロの油漬け缶詰の製造というのも昭和初期、この時期から始まる。これは、考えてみたら、地元の技術と水産政策、漁業政策の關係で出てきたことだと思いますけれども。それは柳家本店①の社史記録からこの状況を辿っておきましょう。

昭和恐慌期二代目村松善八のマグロ油漬け缶詰製造・焼津漁業

界は、一九三一年初夏から空前の大漁期を迎え、魚価大暴落。○三市場は水揚げ量の史上空前にも拘わらず、総売上高では一〇％に近い下落。当時は冷蔵機能も十分ではなく、加工業はなお手作業であつたためにフル操業でも追いつかない状況。このような処理能力の限界が、魚価維持を困難にさせた要因の一つ。この時期、同商店は経営危機に陥り、幹部職員への給与支払いも一時延期に陥つた。三二年、焼津地区の明治銀行など三行が金融機関も預金支払い延期を行つた。「豊漁貧乏」の一時代。以下に述べる南洋からの流入が更に追い打ちをかけた。

一九三三、三四年には南洋パラオ、トラック島方面の安価な鰹節が国内に流入。南方では一年中がカツオの漁期。これには沖縄製造の経験ある沖縄県人が製造に参加して、優良で安価な南洋節を製造することを可能にした。一九三七年農林統計では、国内鰹節生産高二五五万貫、南洋節五〇万貫。業界は南洋節の輸入規制を政府に要望したが、南洋拓殖は国策であつたために受け入れられず。その後軍需景気で三十〇四十年には好調。①は、鹿児島方面との協力関係を結び、山川で現地生産、現地市場への切り込みを行っていた。

一九三二年五月、マグロ油漬け缶詰製造を目的に善八は焼津水産缶詰(株)が設立されるのに魚商・鰹節製造業者と共に一三名の発起人となつた。三四年同社は後藤缶詰に実質的に経営権が移つた。ただし善八は焼津工場の支配人となる。

物資欠乏時代の一九三九、四十年頃は鰹節全盛時代。けずり力ナが大いに使用されていた。

一九三四年神奈川横須賀に①出張所を、三七年には東京築地

に①富士屋本店を開設、横須賀は海軍軍需部納入が主業務、東京は関東地区の販路拡大拠点。富士屋本店は村松正之助が統括。四二年四月の米軍の本土空襲からまもなく閉鎖。焼津本店は軍需納入として鯉節角切。外交員による直販システムや通信販売を導入し各方面の市場めがけて攻勢。戦前の①鯉節店の従業員構成は、年期奉公人や焼津水産学校、沖縄県立水産学校からの実習生なども受け入れ、鹿児島県山川、枕崎への技術指導も行っていた²²。

三、戦争と焼津

(1) 昭和の大恐慌と焼津地域

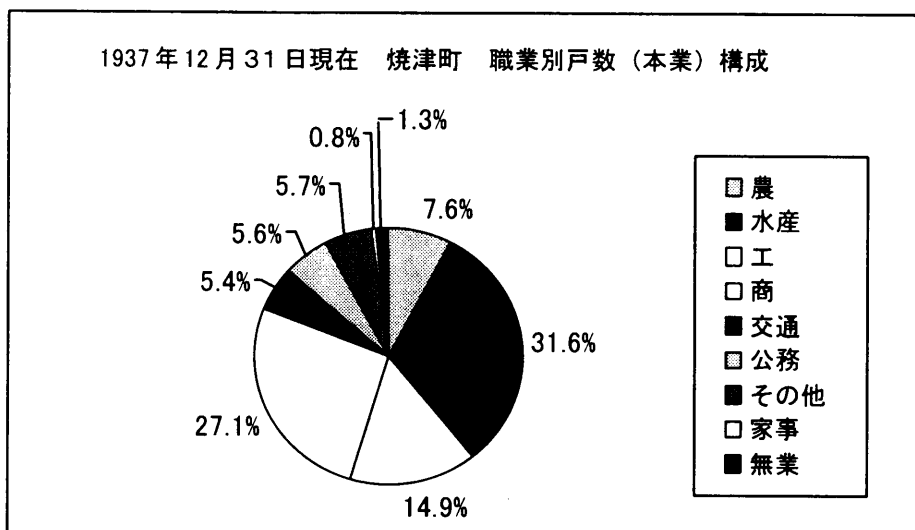
「農村不況実態調査」というのがあります。静岡県農会が出したものです。私は『静岡県史』でも、また最初の取り組みであった『袋井市史』他の市町村史でも、農村不況調査というのを使っています。焼津町商工経済統制というのもこの時期の問題ですけれども。戦争と犠牲者の悲劇。焼津地域の恐慌現象というのは、地域によってさまざまなのですけれども。次の表に示しましたように、昭和の初めの焼津地域の農業経営構成。豊田村の農業者総数八一七うち本業が七五九で圧倒的ですよね。九三％本業です。大富村が九一％本業。和田村が七七％位。小川村が九二％。東益津村が七二％。焼津村が七〇％。全体としては、農村的です。ただ、自作人と小作人の関係で捉えたときに、自作人の比重はそんなに高くないです。東益津村ですか、四二％もあるのは。あとは、自作兼小作。あるいは小作。そういうことになります。小作がそんなに高いともいえません。大富村を除けば。自作兼小作というのが、高い。自作でありながら土地

1927年の焼津地域農漁業の状況							数、%	
	農業者総数	本業	副業	自作人	自作兼小作	小作		
豊田村	817	759	58	196	342	279		
		92.9	7.1	24	41.9	34.1		
大富村	1,905	1,740	165	364	787	754		
		91.3	8.7	19.1	41.3	39.6		
和田村	2,215	1,695	520	285	1,745	185		
		76.5	23.5	12.9	78.8	8.4		
小川村	1,232	1,133	99	351	752	129		
		92	8	28.5	61	10.5		
東益津村	1,735	1,251	484	736	499	500		
		72.1	27.9	42.4	28.8	28.8		
焼津町	861	603	258	231	549	90		
		70	30	26.6	63.1	10.3		
	沿岸漁獲	イワシ	カツオ	サバ	ブリ	タイ	サワラ	アジ
焼津/県下	26.9	0.56	17.3	21.3	6	1.1	54.3	2.3
	鯉節	マグロ節	フカヒレ	ナマリイブシ	カマボコチクワ	養殖ウナギ		
焼津/県下	31.4	72.8	4.6	98.2	17.7	11.9		

1927年静岡県統計書より作成

を借りているということです。一九二七年農産物金額構成というのを計算してみたのですけれども。米が本体なのですけれども。その他の食用農産物その他があり、そこそこに生産されている、ということが分かります。地区別漁獲種類の比重というのを見ますと、当然ですけれども、沿岸に焼津は遠洋漁獲。という形で見られます。どんなものを獲っていたのかを計算してみたのですけれども（右の表）、沿岸漁獲物は、焼津が県下の比重をどれだけ占めているかという統

焼津町の職業構成



のは、なかなか言いづらいというのが私の言いたいことです。地区別地域別にどういう個性を持っているかというのを明らかにしない限り、全体がみえないということになります。参考までに戦時直前の焼津町の職業構成を図示しておきます。

(2) 東益津村の経済更生計画

「東益津村経済更生計画」というのがあります。この中に関方区の実行組合というのが出てくるのですが、これを見ると、非常に、生

計表です。焼津は、ナマリ節が九八%。カマボコ・チクワ一八%。鯉節は三一%。マグロ節は七三%。非常に大きな力です。サワラ五四%。こんなふうに出

てきます。焼津地域の工業主要生産額を見ますと、これはなかなか難しいのでなんともいえないのですけれども、焼津町はあらゆる領域を何とか作っている。でも、他の地域は地域的個性があつて、焼津市全体の特色はという

活習慣をきちつとしましうとかそういうことを訴えていることが多い。奉仕的事業をしましう。納税は期日どおり払えよ。毎朝神仏に礼拝しなさい。貯金は奨励しましう。葬式結婚は華美にならずに質素に。そういう類のお金が掛からない方法。後は、増産計画が五カ年計画できているわけです。

一般的に不景気だ、不景気だといっても、不景気に見えないことも多いのですけれども、地域によつて。焼津の場合、遠洋漁業とか水産業とか、この時期に猛烈に発展してきますから、そうすると地域性として余り大きく不況が見えなくなる。明治銀行が焼津にはあつたのです。これは、名古屋にあつた銀行の支店です。焼津漁業と信用販売組合、^⑤が出てきて、あるいは、焼津には地域銀行がたくさんありました。焼津銀行というのがあつたり、焼津商業銀行というのが出てきたり、あるいは、明治銀行が焼津銀行を合併して、小川銀行が水産投資事業を継承して焼津水産銀行になつたり、金融機関も多い。大富永盛社というのが、大富銀行になつて島田銀行になつて、後に焼津銀行になります。このように、銀行群が多いのも水産業の中心地だということだと思ふ。そして、お手元に表がありますが、ほんとうにたくさんあります。狭いところに。

(3) 不況と焼津地域の金融事業

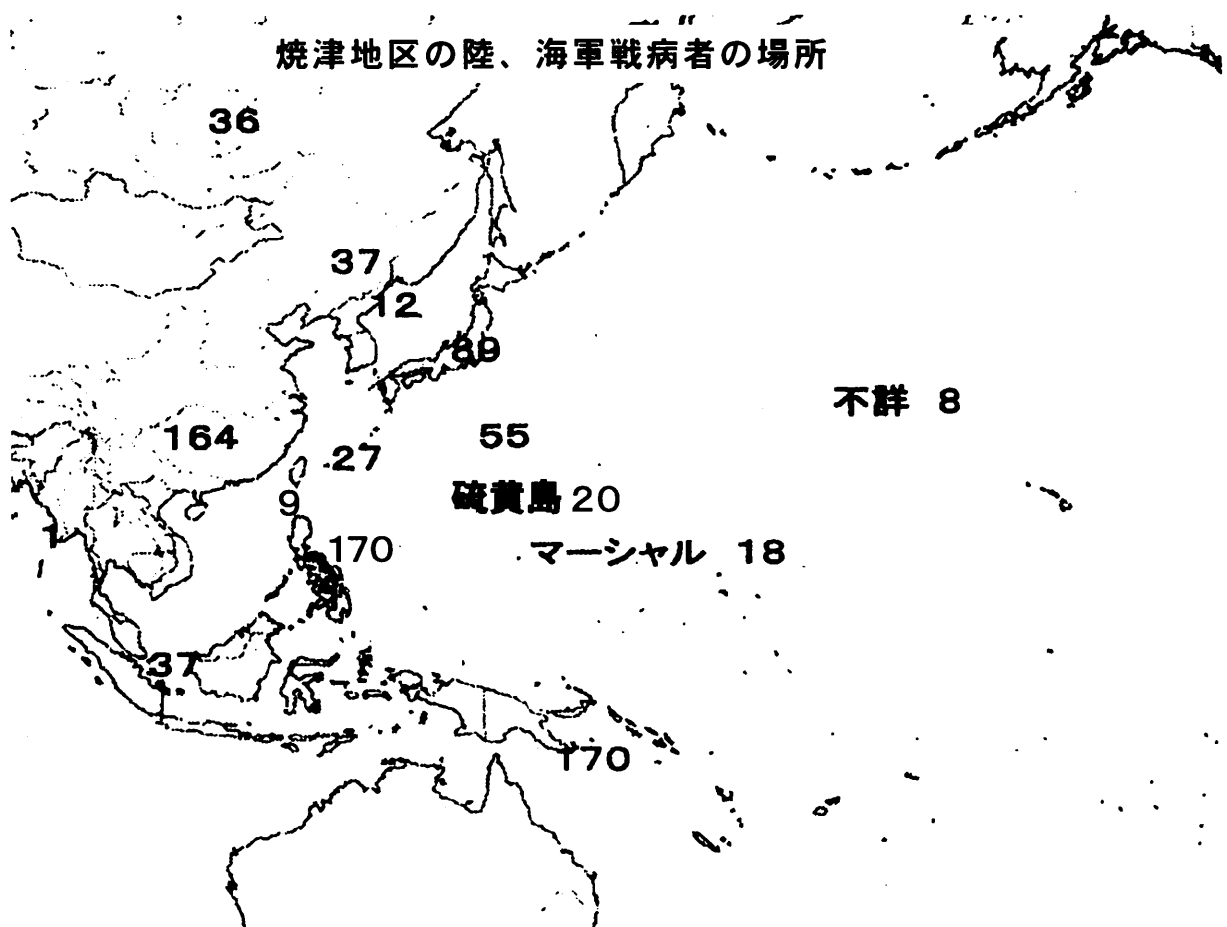
焼津生産組合、信用組合、信用金庫の活動実績というのがあります。全体としては、組合員数が、焼津^⑤が第一次大戦中までは増えていなかったのが、一気に増えるのが大戦後です。協同組合事業の一環になつて入ることによつて組合員が増えた。これは、戦後も同じような流れを作っている。

焼津信用金庫というのがありますよね。これは、東海遠洋漁業が一九〇七年、日露戦争後にできて、有限責任焼津生産組合が次の年に出来て、それを踏まえて焼津信用購買生産組合に改称されて、これが焼津信用販売購買利用組合のちに東海遠洋漁業と合併して、昭和漁業となり、そして、戦後、焼津信用組合焼津信用金庫というふうに展開してきた。

(4) 焼津地域の戦争犠牲者と戦争の意味

さて戦争と犠牲者の話をしたいと思います。焼津市の戦争犠牲者はこのような流れなのです。つまり、焼津市六地区の戦病死者数というのは、極めて多くなるのはこの時期です。太平洋戦争の終結直前です。終結直前に大量に死ぬのです。十九年のこの時期。昭和二十年八月十五日までの時期。この時期に圧倒的な人が死んでいるのです。これは、日本の戦争指導がいかにおかしいものかということ。ほとんど敗北するのを分かっていたと海軍将校がいったのは、ミッドウェイ海戦。昭和十七年ミッドウェイ海戦。敗北は確実だと後になってから釈明した長官がいるのですね。止めればよかったのだけれども。止められないどころかこの後の犠牲者が多い。ここが特色です。海軍もしっかりです。やっぱり、ミッドウェイ海戦が昭和十七年ですね。その後、ガナルカナルとか南方洋上での決戦で、死んでいて、フィリピンで大量に死んで。この時期の死者が多い。これを別の角度から見ますとつぎのようになります。

死んだ場所(下図)。焼津地区の陸、海軍戦病死者七九五について見ると、中国が二割。中国東北というのが四・七%。二五%位は中国戦線で死んでいる。フィリピンが二〇%。後は、南洋が一四%。



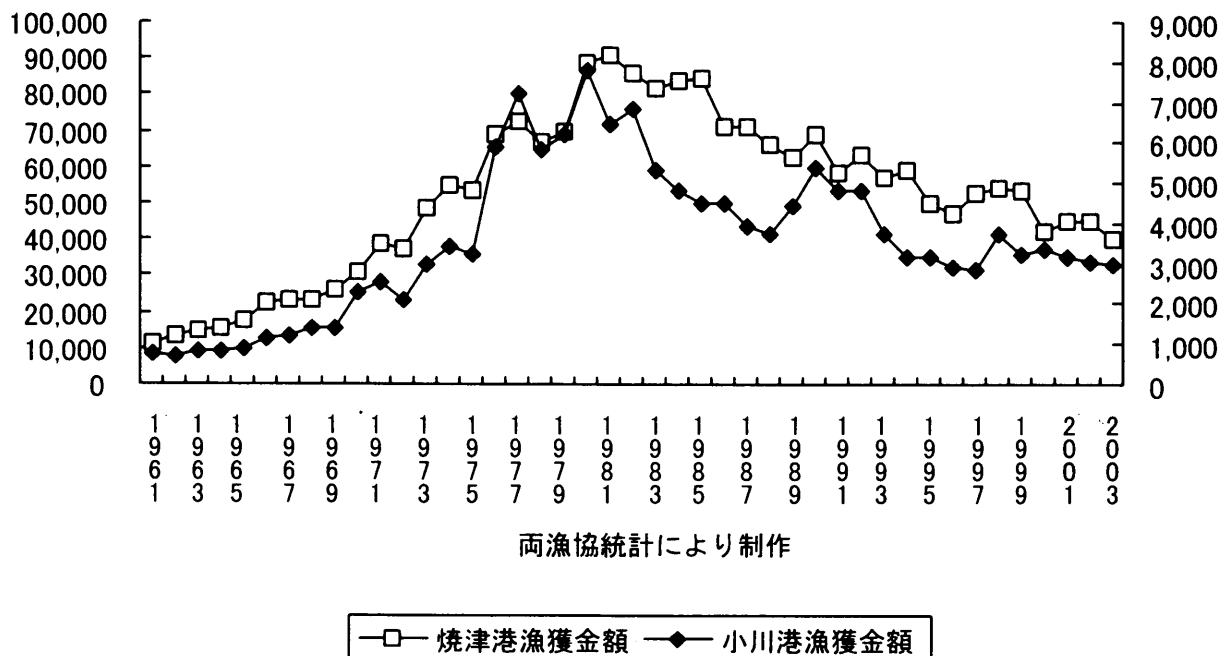
だから、まとまった戦争行動で死んだのが多いのは、中国本土とフィリピン等。それは何を意味するかというと、あの戦争は、日中戦争でもあり、太平洋戦争でもあった。決してアメリカに敗北したわけではない。日本は、大量に中国で敗北している。中国で敗北したので戦域を拡大して、太平洋戦争で最後のとどめをうたれた。そこについて、歴史を学ぶときに、私たちは、太平洋戦争といていたのですが、あまり、太平洋戦争というのは、適当ではない。アジア太平洋戦争というのが、一番正解かなあと 생각합니다。戦争で誰がどこで死んだかという所まで捉えていった場合、その意味というのを考える必要がある。これを地図に落とすところなる。中国全体で一六四人死んで、中国東北で三七人死んで、シベリアで強制連行されて三六人死んで、日本列島で死んだのは戦死ではないですね。病死でしょう。沖縄戦二七人、フィリピン一七〇人。このように、死に場所を図面に落としてしまうと、これは、戦病死と書いてあるけれども、病死が多い。戦死者は少ない。四割方は病死。ですから、餓死です。餓死と病死です。ここも、戦争の実相を考えるとときに、重要な問題だと述べておきたいと思いました。これは、大富地区の陸軍戦没者です。これも非常に明快です。一九四四年（昭和十九）の時期、フィリピン戦でだめになっている。こういうことで、し、海軍も同じです。

四、焼津水産業の発展と地域社会の変貌

（一）焼津漁業の発展状況

戦後は、戦後の焼津を考える時に、戦後も漁業水産業というのが

焼津と小川漁協の漁獲金額比較 100万円 左：焼津、右：小川



重要な役割を果たしたというのが、皆さん実感をされている所だと思います。そういう中で、やはり水産業が多角化したといっている。単に魚を獲っていたという時代からそれを加工して缶詰その他を造り、さらに水産化学工業のようなものまで作っていく。多角展開することによって、焼津地域は産業発展にそれなりに、役割を果たしてきたのではないかということができるだけ。そういう点で、地域の産業発達史を考えるとときに、この地域の個性というのが重要な役割を果たしますから、その個性というのを考えることなしに、一般論を語っているのはいけないというのが、私のいいたいことです。

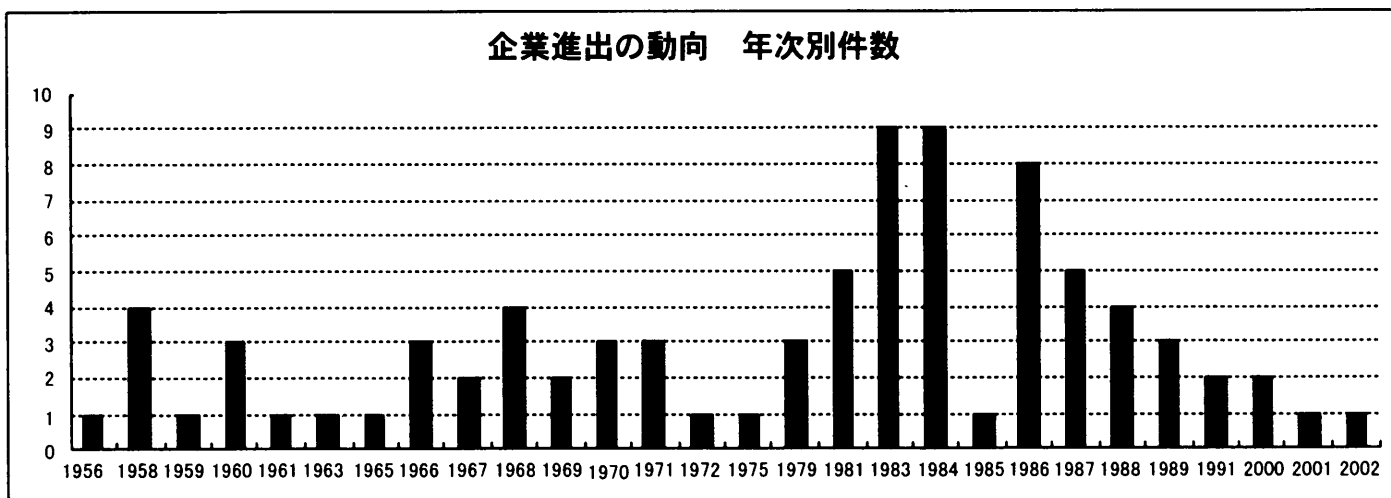
焼津漁業の発展というのを今度の通史の中で書いておきましたけれども、こうしてみると焼津は水揚げ高の上昇と小川の水揚げ高の上昇がある。一九八〇年代初めまで上昇です。その後下降している。焼津漁港の水揚げ量と金額で行くと、五十年代には水揚げ量の伸びがすごく高い。金額的にはそれほどでもない。金額的に高まるのは七〇年代に入ってから。だから、単価が上がって収益が上がっている。その後また落ち込む。そういう点では、今、水産業はそんなに

以上のようなことから、焼津というのは、水産業を中心に発展した地域なのだという点を改めて認識しました。そういう点で水産業も人口がかなり減ってきて、六八年、七八年の十年間だけでとってみても、これだけ水産業が減っている。年齢が相対的に高くなっていることも特色ですね。ですからその点も、焼津がこれからどういう生き方をするか、水産業の直接の労働者はもう日本人でなくなりつつあるということですから。年齢別にみても、年齢は高くなりますし、焼津漁業の経営というものを見ても、専業（四〇→一九）、

漁業が主（六五→四三）、漁業が従（三七→二二）、雇われのみ（四六四→一二六）、雇われが主（六九六→一七二）、雇われが従（二二二→一〇五）というのもこんなふうに変わっていきま

す。時系列的に落ちていつていきますから。焼津の一九七八年から二〇〇三年の漁業経営についても、ご覧ください。漁業従事者が六〇年の四二〇〇から二〇〇〇年の一六〇〇人程度に激減している。雇われが主としても、激減している。だから、これからの焼津は何で生きていくのか課題になる。就業構成で見ますと、焼津

焼津の企業立地 従業員30人以上 件数



静岡県商工労働部「静岡県企業立地動向従業員30人以上」から作成

の一九六〇年は農業が大きなウェイトを占めている。同時に製造業も大きな役割を果たしている。これは、二〇〇〇年では、農業が二・三％。漁業が一％。もうこんな状態。製造業が三一％ありますから、これは、大きな役割を果たしていると思う。これは、全国的な水準からいうと高い。きわめて高い。高いのは健全です。ものづくりは大事です。静岡県企業の企業立地動向から従業員三〇人以上を焼津について拾ったらこんなに出てくる（一九五六年から二〇〇二年で八一件）。だいたい八〇年代初めがピークです。（八一―八五年で二四件）あとは、そんなに増えません（図を参照）。そういう時代ですから、焼津のような手狭なところで、これだけ立地してきた。というのは大きな意味を持つ。

（２）漁業と水産加工業

水産加工業の構成で興味深い点をいっておきますと、二〇〇〇年で練り製品の比重が一四％。その下に、飼料肥料というのが四八％もある。これが焼津の特色です。水産業の。水産化学などいろいろなものが出てくる基盤になってくる。それによって、全国標準よりは高い、特化している。これが特色。特化しているところで、次の展開が出来るのではないでしょうか。

原材料がマグロからカツオにシフト。マグロの高騰で原材料をカツオに変化しました。

（３）これからの焼津地域、自治体とは何だろうか

これからの焼津地域の問題。地域自治と市町村合併の歴史。全国的に見ても焼津で見ても、ほぼ同じことがいえるのですが。一八八

八年（明治二十一）市制町村制が入ったときに合併が行われる。昭和初期、昭和不況の時代に合併を行なった。一九五三年地方財政危機ということがきっかけで合併が行われた。その場合の合併の根拠は、自治体の規模を拡大することによって、能力を高めるという戦後改革の精神を一応継承している。現在、平成大合併が行われている。むしろ今回は地方分権化法制と一体で推進されている点ではこれまでとは趣を異にしていることは事実です。しかしとはいっても、今回も、財政危機ということと無縁ではない。問題は、財政危機と市町村合併がさけられないとしても、私の理解は、では市町村単位というのはどこにあるのだろうかということです。市町村住民にとってのサービス提供の中身はということになる。このことが、多分、問われている。市町村が合併すると、例えば、サービス低下するのですね。確実に。一般的にサービスを低下します。これは不可避のようです。²⁴しかし他方で人口は確実に高齢化します。高齢化すると、サービスは出来るだけ手近かに得られるのが望ましい。それは、願うことも出来ない状況にある。それに変わるサービスというのは、どこで支えるか。例えば、IT技術による支えやNPO事業とかいろいろな形の支え方を新しく構築しないと。だから、そういう意味では、総合的な認識としてもので支えるとか、金で支えるとかソフトな支え方を考えていくというのが、今の時代かもしれないなあと思います。

今、求められている課題というのは、市長さんたちも見えられて、二市二町合併問題は色々な動きがありますけれども。お困りになっているのは、おそらく、どのように人々の自治とサービス提供とバランスが取れるかというところ。財政的にはどこまでサービス提供

を続けていくことができるか。出来ない場合はどこで補うのかという、小さくない問題があるのだろうと、焼津市長さんが、二市二町合併を止めることへの説明会（二〇〇五年十二月）があったので、聞かせて頂きましたけれども、大変苦労されているということがわかりました。アメリカでは、市町村合併はやっていない。私が六年前に在住したカリフォルニア州サンフランシスコ湾の東対岸（サンフランシスコ市は湾の西河岸にあります）の町を例に取りますと、BART (Bay Area Rapid Train 公共鉄道) という大変便利な地下鉄がサンフランシスコ空港あたりから、湾岸をぐるっと取り巻いていて、日本で言えば、島田駅から静岡駅までの距離でも三ドル程度です。その距離の中にサンフランシスコ市、エミリビル、オークランド、バークレー、アルバニー、エルセリット、リッチモンド市という多くの市が並び、ほぼ駅ごとに市が存在しています。エルセリット・デル・ノルテからサンフランシスコ中心地（パウエル・ストリート）までハイスピードのこの鉄道で約三十分、駅の数が一一ですが、三・六〇ドル程度で、大変安いのです。その周辺にまたケンジントンその他小さな市があり、小さな市ではグループを組織して消防や教育機関（公選制教育委員会）の相互協力を図っているに過ぎず、それぞれ独自の自治体として機能しています。この状況は最近、同地に再訪している状況からも何らの変更はありません。ヨーロッパも同様に大きな自治体合併などは行われていないのです。要するに自治観念の歴史的な相違と、自治機能に対する住民の期待の相違が厳然として存在しているのではないのでしょうか？当然自治体の数を減らせば住民の意思の反映機構を縮減させますから（実際にも浜松市が一一市町村大合併した結果、旧市によつては代表する市議割当が

何と数名以内です）、それだけに自治体は一層住民から縁遠い存在になることは明白です。明治期の昔の自治体は統合せずに連合自治の考え方でやっている。だから、それも一つのアイディアかなあと、選択肢かなあという気もします。ただ、それをしようとしたら税制の構造を変えないとなかなか地域を支えられない。そういう点での構造改革は絶対に必要でしょうが。

註

(1) カール・マルクス『資本論』第一卷一八六七年がそれを明確にし、その後の経済史学の基本にされました。その後の研究では工業の変革に先んじて、イギリスの農業で鉄車輪の開発による農業生産力の拡大を重視する見方が登場しています。

(2) ベルギー西部を中心にフランス北部からオランダ南西部を含む北海に面する地域。かつてフランドル伯の領地。

(3) トーマス・モア『ユートピア』一五一六年は「羊が人間を食う」と表現しました。

(4) 大塚久雄『欧州経済史序説』（時潮社、一九四四年）。

(5) 川勝平太『日本文明と近代西洋』NHK出版、一九九一年、

“Was the Indian Cotton Industry Wiped Out by the British Industry? – Japanese Civilization (Part 24)”
Japan Spotlight, Nov./Dec., pp. 46–49,

“The Spread of Cotton Westward – Japanese Civilization (part 19) Japan Spotlight, Mar./Apr., pp. 47–50,

浜下武志／川勝平太『アジア交易圏と日本工業化1500–1900（新版）』（藤原書店 二〇〇一年）。

- (6) 山田盛太郎『日本資本主義分析』(岩波書店、一九三四年)。
- (7) 近代日本にとって香港との貿易は重要です。それは同港を中継基地にして欧米への輸出と輸入が行われていたからです。しかも貿易商はほとんど外商によって支配されていたのです。塩沢君夫他『日本資本主義再生産構造統計』(岩波書店、一九七三年)。
- (8) 安藤実『漢冶萍煤鉄公司』アジア経済研究所、一九六七年。
- (9) 田中忠治『豊田佐吉伝』トヨタ自動車工業、一九五五年。
- (10) 武居良明『イギリス封建制の解体過程』未来社、一九六四年及び『産業革命と小経営の終焉』(未来社、一九七一年)。
- (11) 大石嘉一郎『自由民権と大隈・松方財政』(東京大学出版会、一九八九年)。
- (12) 森信勝『静岡鉄道興亡史』(静岡新聞社、一九九七年)。私が監修しました『静岡県鉄道写真集』郷土出版社、一九九三年ではこの事実が明らかでなかったので、豆相人車鉄道を最初の路線として記述しました。ここに訂正させて頂きます。
- (13) 東洋紡績株式会社東洋紡績七〇年史編修委員会『東洋紡績七〇年史』(東洋紡績、一九五三年)。
- (14) 山本義彦『戦間期日本資本主義と経済政策』第三章(柏書房、一九八九年)。
- (15) 野呂栄太郎『日本資本主義発達史』一九三〇年(『初版日本資本主義発達史』上・下として大石嘉一郎解説、山本義彦注解で一九八三年に岩波文庫から刊行)。大石嘉一郎編『日本産業革命の研究』上・下(東京大学出版会、一九七五、七七年)。
- (16) 西川博史『日本帝国主義と綿業』(ミネルヴァ書房、一九八七年)。
- (17) 日本銀行『明治以降本邦主要経済統計』一九六六年により算出。
- (18) THE INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON EXCHANGE AND COOPERATION OF SCIENCE AND TECHNOLOGY IN ASIA (ECSTA) Session B. 1995.11.14-15. Japan Scientists Association *The Characters of The Introduction of Western Technologies into Japanese Capitalism.*
- (19) 赤阪鉄工所編『赤阪鉄工五〇年史』(赤阪鉄工所、一九五九年)。
- (20) 静岡県水産試験場『指導船富士丸ト陸地無線電信ノ施設』一九二二年三月。
- (21) 宮地正人『日露戦後政治史研究』(東京大学出版会、一九七三年)。
- (22) 東京帝国大学農学部農政学研究室『漁村経済の研究』一九三三年(昭和八)八月。
- (23) 柳屋本店社史編集委員会『かつお一筋に生きる』(柳屋本店、一九八六年)。
- (24) 保母武彦『「平成の大合併」後の地域をどう立て直すか』岩波ブックレット、二〇〇七年。